それゆけ！ ウマソルジャーV　偽ルドルフ伝　with my fate

三十六分儀

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説の生徒会長　シンザン大先輩を超えろ！

若き皇帝ルドルフ。彼女を待ち受けていたのはトレセン学園ではなく、ヘンテコな学園基地とヘンテコなウマソルジャーＶであった。

レース無き世界で最強戦士「シンボリルドルフ」に憧れる偽者となってしまったルドルフ。そんな彼女の明日は絶賛行方知れずである！先ずは突っ込み疲労にかかったグリーンスズカを助けよう！

※誤字脱字修正しました。他作品ネタあります。

ウマソルジャーＶとは！今日も町の平和を護る為、熱血とノリと伊達と酔狂で闘う５人のヒーロー達の事である。それがウマソルジャーＶ。行け行けウマソルジャーＶ！正義の味方、ウマソルジャーＶ！Ｄｒ．マッドタキオンの陰謀に立ち向かえ！

目　次

ウマソルジャーV敗れる！　偽ルドルフ登場 ―――― 1
誕生！　ブラックルドルフ　～レース無き世界にて～ ―――― 13
先陣争い！　倒せ！ブラックルドルフ　トウカイテイオー　対　シンコウウインディ ―――― 20
衝撃、ナレーション乱入　ニセマックイーン登場！　脅威！ビワハヤヒデの頭 ―――― 28
ビワハヤヒデ　対　Ｖｉｃｔｏｒｙ　ウマロボ！　大怪獣オグリン覚醒か！ ―――― 37

ウマソルジャーV敗れる！　偽ルドルフ登場

【ヒーロー劇場！　ウマソルジャーV　栄光のヴィクトリー・ロード】

前回のあらすじ（ナレーション）

「Dr．マッドタキオンの陰謀で商店街が危ない！

しかし、なんやかんやあってウマソルジャーVがヴィクトリーしたぞ。良くやったウマソルジャーV。絶対に負けるなウマソルジャーV

彼女たちの活躍によってDr．マッドタキオンとダークマンタッハンCは避けられた。しかし、ウマ娘とトレセン学園基地の平和はまだまだ遠い。世界の平和は君たちに託された！」

【第二話　ウマソルジャーV敗れる!?　偽ルドルフ登場！】

シンボリルドルフは新入生である。トレセン学園に入学し、レースで唯一絶対の存在となるべくしてやって来たのだ。

若くして面接官を圧倒し尽くしたその威圧感。凛々しい風貌。相手を目で殺せる程の眼光。全てが普通のウマ娘の枠を超えていた。もはやレースを走るウマ娘と言うより神話に登場する神ウマ娘といった所か。

「ここが日本ウマ娘トレーニングセンター学園なのか!?」

若きルドルフは少々当惑した。門にはこう書かれていたからだ。

「日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地」と。

「予め確認したはずだ。ここで間違いないのだが。なぜ別の学園が立っているのか。」

困った彼女は校門の側に立つウマ娘に声をかけた。やけに自信満々かつ堂々と構えていたので頼りになるかもしれない。そう思ったからだ。

「済みません。少し確認させて下さい。ここは日本ウマ娘トレーニングセンター学園でしょうか？」

そのウマ娘はポニーテールにピンク色の変わった勝負服を来てい

た。
「やや！何かお困り事でしょうか？ならばこのスーパーバクシン戦隊の紅一点！ピンクバクシンオーにお任せあれ!!!」
　声も動作も大き過ぎる彼女。その上、戦隊モノよりは仮○ライダーバリの奇妙なキメポーズまで。余りのハイテンション振りに、ルドルフは唖然としていた。果たして今の彼女は素面なのだろうか？もしかしたらもしかしなくとも、何か道草で喰ってしまったのでは。
「ここは悪の組織　『なんとかかんとか』とその構成員達と戦う為に作られたのです！そして、私はサクラバクシンオーです！」
　若き皇帝は一体全体何を言ってるのか、皆目見当も付かなかった。なんとかかんとか？その謎の適当振りに思わずこめかみに十字が浮かびかかる。
　しかし彼女はそれを抑え、あくまでも冷静沈着に対応しようとする。もしかしたら敵組織の名称が不明なのかもしれないのだから。もしくは、機密事項であるのかもしれない。
「レースに出て勝つ為に作られた学園ではないのか？名称は日本ウマ娘トレーニングセンター学園では？」
「違います！」
　一抹の可能性は一言でばっさりと切り捨てられる。
「私こそ栄えあるスーパー委員長にして正義のヒーロー　ウマソルジャーVのピンク担当！ピンクバクシンオーなのです!!ようこそ、学園基地へ！」
　そう言ってバクシンオーを名乗るウマ娘が親しげに手を差し出してきた。
（私は降りる駅を間違えたのか？それとも誑かされているのか？もしかすると、ファンとの交流イベントがあり、その予行練習をしているのではないのだろうか？）
　ルドルフの脳内をバクシンオーは滅茶苦茶にしていた。
　故郷ではライオンと畏れられた彼女も、バクシンパワーを相手取るにはまだ経験不足気味の様である。
「シンボリルドルフだ。宜しく頼む。」

敬語を忘れ、思わず普段の口調で自己紹介をするルドルフ。すると、名前を聞いたバクシンオーは怪訝な表情を浮かべた。
次の瞬間、奇妙な音が流れ始める。やけに耳に残る、勢い任せの音楽らしきモノだった。
「バクシン!バクシン!バクシン!　バクシン!バクシン!バクシン!」
「やや!怪ウマ娘が現れた様ですね。」
バクシンオーはニンジン型のヒーローっぽい機器に戸惑っていた。警報音の停止方法が分からないせいである。
「あの～、この警報音の止め方を知りませんか?」
スーパー委員長でも分からない事はあるのだ。仕方が無い。
ルドルフは思う。
(本来見知らぬ他人に安易に見せるモノでは無いのでは?)と。
何より、警報音がうるさいのだ。かくもしつこく繰り返されるバクシンソング。このままでは脳内に刷り込まれそうである。このままでは明鏡止水の境地が台無しである。早めにとめなければなるまい。
(分からない・・・。)

残念ながらルドルフにも分からない事はあるのだ。彼女は生まれてこの方、おもちゃ売り場の玩具に関心を示した事など一度も無い。
生まれながらの戦士にはそんな玩具など視界の中にさえ入ってこなかったのだ。それが遂にあだとなってかえってくるとは誰が想像し得ただろうか?
「バクシン、バクシン、バクシン～。　バクシン、バクシン、バクシン～。」
先程からバクシン警報が流れっぱなしである。それどころか、心なしか疲れた口調に変化していた。更に合成音声とも思えない奇妙な勢いと暑苦しさが感じられる。
「ピンクバクシンオーさん。もしかしたら、この警報音は貴方の声では?」
待ってました、よくぞ聞いてくれましたとばかりにバクシンオーが

更に迫って来る。おでこがやけに光る満面の笑みを浮かべて。
（顔が近いな。）
「その通りなのです！何をかくそうこの警報音は私自身の声なのです！デフォルトの音ではぜんぜんバクシン出来なかったので、それどころか頭痛がしてしまいまして。」

「そこで、そこで、勝手に変えてしまいました。スーパー委員長として責任を果たす為には仕方がなかったのです！おかげで止め方が分からなくなってしまいましたが。」
学園基地？の備品を勝手に改造して良いのだろうか？皆の模範たる学級委員長はどこへ行ってしまったのか。
ルドルフは訝しんだ。
更に言うならば、何故なかなか警備員が集まって来ないのだろうか？用をなさないシステムなど変えてもみせよう。彼女は密かに決意した。自分が生徒会長となって。シンザン会長は一体全体何をしておられるのか。
バクシンオーは歴史の大きな曲がり角を曲がらせてしまった事に、この後も気づく事は無かった。
（集う５人の戦士たち。怪しいウマ娘と戦うべく参上だ！）ナレーション。
「燃える正義の赤い炎。レッドペガサス！」
「正義が一番・春一番。ピンクウララ！」
「吹き抜ける正義の疾風。グリーンスズカ」
「そして、私こそが爆ぜる正義の桜吹雪。サクラバクシンオーことピンクバクシンオーなのです！」
「５人揃って正義のウマ娘。ウマソルジャーファイブ！」
ルドルフは困惑を通り越して呆れていた。このような子どもじみたヒーローショーに興味など無い。公衆電話を探すか、近くの交番にでも行った方が良さそうだ。
「ちょっと待って。」
グリーンスズカが待ったをかけてくる。

「ブルーは?ブルーはまだ来てないの?」
「それだけではないな。ピンクが被っている。」
　思わずルドルフも突っ込んでしまった。それが地獄の門を開ける行為と知らずに。
「そうなのよ!助けて!」
　やや疲れた口調のグリーンスズカ。既に突っ込み済みらしい。
「お願い!私と一緒に突っ込んで!」
　ルドルフは鬼気迫る表情で迫るスズカに困惑した。今日はこれで何度目の困惑だろうか。これまでのウマ生でこれ程彼女が他のウマ娘に振り回された事など無かった。全く初めての状況に、ルドルフは思わず思案する。
(私の当惑振りから推察するに、突っ込み役はかなりの重労働なはず。例えるならば、延々と短距離を繰り返し走らされている様なモノだ。)
「どうかしたの〜」
「ブルー　遅いよ!」
　遂に最後のソルジャーが登場した。
「なんでバナナを食べているの?!」
「ビワハヤヒデにもらったから〜。」
　ウララがブルーのバナナを指を咥えて見ている。
「私も食べたい!」
「もう突っ込み切れない!」
　この混乱した現場を納めるのは誰だ。大先輩シンザン会長を超えんとするルドルフにおいて他にない。彼女は威厳ある態度を取り戻すとズイズイと前に進み出た。
「静まらんかあああああ!!!!!!」
　皇帝の神威が辺りを制圧していく。かかりぎみだったウマソルジャーたちもようやく沈静化したようだ。
「ありがとう。おかげで助かったわ。」
　スズカは涙を流してルドルフに感謝する。両手を持って感激しながら。
「ねえ、ウマソルジャーの候補生にならない?」

（ナレーション）
「ウマソルジャーＶ正規の隊員、レッドペガサスから勧誘されたルドルフ。彼女の最強戦士への道はまだ始まったばかりだ。」
（その様なつもりは無い。私はレースに勝ちに来たのであって、ウマソルジャーになる為では無いからな。）
　早速ナレーションにまで突っ込むルドルフ。バ体の仕上がりは絶好調だ！
　とは言え、ウマ娘たちの上に立つ素質を示せた事は確かだ。その点だけは彼女も納得していた。
　その時、ウマソルジャーたちに通信が入る。映像が浮かび上がり、褐色の肌をした長髪のウマ娘の姿が映った。
「ヒシアマ長官！」
「今、目の前にシンボリルドルフを名乗る不審なウマ娘がいるだろう。そいつは怪ウマ娘の可能性がある。先ずは質問、抵抗するなら引っ捕らえな！」
　長官から目の前のウマ娘こそが偽ルドルフであると通信が入る。
「待て！私の入学はシンザン会長もご存知だ。」
「シンザン大先輩は前の会長だ。今の会長はルドルフ。あんたこそ何ウマ娘で本基地に何の用で近づいた？Ｄｒ．マッドタキオンの手の者か？」
　ルドルフは今の生徒会長がシンザン会長だと思っていたが、何時の時代の話をしてるんだと一蹴りされる。
「私はトレセン学園に行かなくてはいけない身だ。このままでは時間に遅れてしまう。それに、Ｄｒ．マッドタキオンなぞ聞いた事も無いのだが。」
　未だにバクシン警報がとどろき、慌てるスズカ。
「そんな。」
　スズカはショックを隠せない。ようやく見つかった貴重な突っ込み役が身元不明で会長の名前を堂々と詐称する怪しいウマ娘だったとは！これは由々しき自体である。
「ごめんなさい。でも私たちはウマソルジャーＶ。世界の平和を護る

為、この状況に対処します。」
「交渉決裂だな。だが、待ちなあんたたち。正義の味方なら正々堂々とタイマンで勝負しな！」
長官から集団戦法を無視した謎の激が飛ぶ。スズカの突っ込みＭＰは枯渇しかけているぞ。
わざわざ一列に並んで次々と襲い掛かるウマソルジャーＶ。
「ビゴーォォォォ！」
レッドペガサス。キャロットキックを外され、死闘の末に遂に自爆す。
「ウララァァァァ！」
ピンクウララ。そのままころんで地面に激突し、破れる。
「バクシンンンンン！」
ピンクバクシンオー。突如として超加速して疲労の末、ヘロヘロ状態で破れる。彼女に長時間の乱取りは厳しそうだ。
「待ってみんな、私は・・・。」
思わずためらうスズカ。ようやく見つかった貴重な突っ込み役の正体。次々と突っ込みだらけの破れ方をする仲間たち。突っ込みが全っく追いつかない。
ブルースカイことウンスはバナナ先輩からもらったバナナを食べて戦闘に参加さえしていない。ルドルフはこれ幸いとばかり離脱をはかった。
所が突然ブルーはバナナの皮をルドルフの足元に放り込む。彼女はブルーを警戒していなかった為、バナナの皮で滑って転んでしまった。
「イグ・ノーベル賞アタック～。成功だね～。」
こうしてルドルフはとうとう捕縛されてしまったのだった。
「正義は必ず勝つ！バクシン！バクシン！」
「やるなブルー！キャロットバッチだ！」
「バクシンピンクさん～。その警報音止めてもらってもいい～。」
バクシン警報は依然としてけたたましく鳴り響いていた。すると、突如としてバクシン警報はテイオー警報へと変わった。

「テイオー！・テイオー！・テイオー！　テイオー！・テイオー！・テイオー！」
「やや！・これは一体どういう事でしょうか！」
　思わず困惑するバクシンオー。今ごろどこかで誰かがしたり顔でもしている事だろう。
「テイオーがいたずらしたんじゃない～。」
　その時、突如としてルドルフの脳内に出所不明な記憶が流れ込む。その小柄でポニーテールの元気なウマ娘。顔は分からないが確かにこういっていた。
「会長は負けないよ。必ず勝つんだから。だって会長だもん。」
（私は、バナナごときに負けるわけにはいかない。私の知らない誰がこの背中を見ているのだ。絶対に！・絶対に！・絶対にだ！・）
　ルドルフは謎の復活を遂げた。そして、あっさりと
　ウマソルジャーVを全員倒してしまうのだった。
　それを影から見つめる怪しい姿があった。一体全体何者なのだろうか？
　突如として現場に現れたヒシアマ長官。
　腰を落として両手を挙げる奇妙なポーズをとっていた。
「やれやれ。だらしないね。これを投入するか。」
　長官は怪しい光を放つニンジンを見せる。そして、倒されたウマソルジャーたちに食べさせ始めたではないか。
「キャロットリコピンパワー、全員復活！」
　ウマソルジャーVはニンジンパワーで復活した。ちなみにブルーは寝てしまった。
「ウマソルジャーは何度でも復活するさ。あたしたちこそいくら負けても懲りないヒトの夢そのものなんだからね！」
　脅威のニンジンパワーによりゾンビの如く立ち上がるウマソルジャーたち。
「ニンジン！・ニンジン！・ニンジン！　ニンジン！・ニンジン！・ニンジン！」
　ピンクバクシンオーはいつも通りだった。

「キャロットマーン。メークアップ！」
「色々混ざりすぎー！」
　再び突っ込むスズカ。彼女の突っ込み坂は果てしなく遠く、そして険しい。突っ込みＭＰの回復を要求しよう。
「偽ルドルフ強すぎ～。このまんまじゃ勝てないよ～。」
　ブルーが寝言を寝ながら言う。ならばとばかりにペガサスは凛々しい顔つきで叫んだ。
「あれをやるぞ！みんなのニンジンを１つに！」
　すると、ニンジンが１００万ボルトの輝きを放ち、巨大なニンジン型の武器に変形合体した。
「説明しよう。ウマソルジャーバズーカ改とは～（以下省略。）。」
「Ｄｒ．マッドタキオン！」
「ルドルフと言ったかな。何も知らない相手に説明するのも私の役割らしいからね。」
　怪しげなコーヒーを片手に彼女はやって来た。
「ウマソルジャーバズーカ改の威力はかなりのモノだ。きみが勝つ為にはこのコーヒーを飲み、巨大化するしかない。レースとやらに出る前にボロボロになりたくはないだろう？」
　しかし、ルドルフの答えは決まっていた。
「断る！」
「ほう。なぜかな？理由を聞かせてもらってもいいかな。」
「ドーピングに頼って活動つもりなど毛頭も無い。これが答えだ。」
　タキオンはクックックと笑う。
「良い心構えだ。まるで本物のシンボリルドルフを前にしているようだね。それでは観戦させてもらうか。」
　遂にウマソルジャーバズーカ改はエネルギーを充填し始めた。
　長官「余計な電源を切りな。」
　ペガサス「了解！ウマソルジャーバズーカ改内圧力上昇。」
　スズカ「大人しく捕まって。バズーカ内圧力上昇。非常弁閉鎖。薬室内圧力上昇。」
　長官「バズーカへの回路を開きな！」

ペガサス「回路、開くよー！」
スズカ「全エネルギーバズーカへ。強制注入機作動。」
長官　「バズーカ安全装置解除しな。」
スズカ「安全装置解除。セーフティーロックゼロ。圧力発射点へ上昇。あとゼロ、二。最終セーフティー解除。圧力限界へ。」
タキオン「ほう、今度は私たち文字通り一網打尽にすると言うわけか。これはなかなかに面白い。」
タキオンは怪しげにクックックと笑う。
ウララ「前方に偽ルドルフとＤｒ．マッドタキオンを確にーん。距離は１０メートルだよ！」
耳を聾する様な起動音が辺りに鳴り響く。発射時間は既に目前だ。
（だがしかし、どうすればいい）
ルドルフは考える。自分はレースを走る為にここに来たのだ。怪我を負う事はは厳禁だ。しかし、ここで自分がよければ背後の商店会が被害を被るかもしれない。
長官「レッド、操縦をスズカに渡せ。」
レッドペガサス「スズカ、渡したぞ。偽ルドルフ対グリーンスズカ。これで実質タイマンだな！」
スズカ「・・・。」
突然、ルドルフは上空高く飛び立った。それも本人が驚くほど高くあっさりと。
（いつの間にか身体能力が向上しているだと？なぜだ？）
スズカ「軌道修正。ウマソルジャーバズーカ改。発射！」
まばゆい光は誰も居ない上空でぴったり１０メートルだけ伸び、その場で光の網の目が絡み付いた。
ルドルフは華麗にバズーカの攻撃を避けると怒りを露わにする。
「一体何をしているのだ！負傷者が出たらどうするつもりだ。」
「説明しよう。あれは捕縛に特化した自称バズーカ砲だ。特別怪我は負うまい。更に私たちはたいていの事はたんこぶで済むから安心したまえ。
しかし、自称我等が会長？見事な身体能力だね。素晴らしい素体

だ。こちら側に付かないか？」
　しかし、ルドルフはその申し出を断る。
「なら仕方ないね。また会おう。皇帝。」
　こうしてＤｒ．マッドタキオンは去って行った。
「ちっ！逃がしたか。悪いけど、あんたは基地に来てくれないか。タキオンとの関係者かもしれないからな。
　それからエアジャカールに調べさせたけど、存在を実証する情報が如何なる場所にも無かったとさ。もちろんお役所にもな。当然だが日本ウマ娘トレーニングセンター学園なる施設はどこにも存在しない。」
　長官は両手を挙げてこれ以上行動する意志がない事を伝える。
（今のウマソルジャーバズーカ改はエネルギーの再充填に時間がかかる。仕方ないね。）
「もしも、タキオンと無関係ならウマソルジャー候補生としてあんたを超法規的に面倒を見るよ。奴に目をつけられた可能性がある。その代わりに役割を果してもらうことになるけどな。このままだと路頭に迷う事になるよ。どうするつもりだい？」
　ルドルフの目的地はただ一つ。トレセン学園。それだけだ。
「信用出来ないな。私は捕まりそうになったのだから。」
「手荒な真似をして申し訳ない。拒絶されて当然だ。だが、繰り返しになるが、シンボリルドルフという名のウマ娘は既に存在するし、ここにあるのは日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地だ。
　そうだな。先ずは、そこの商店街にある公衆電話で手当たり次第に電話してみな。それでトレーニングセンターにたどり着ければそれにこした事はないが。」
　ヒシアマ長官はテレフォンカードと小銭を投げて寄越すと、受け取ったルドルフは素早くその場を離れたのだった。
「捕まえなくていいの？」
　ウララが長官に聞く。
「タイマン勝負を受けた上にバズーカの射線を空に向けさせたんだ。悪いウマ娘じゃないだろう。それに、念の為密かに護衛をつけてある

から大丈夫さ。」
（突っ込みルドルフさん。無事に帰ってくれればいいけれど・・・。今は信用されないだろうし。）
一方、スズカは声をかける事が出来ず、その場で左回りに旋回する事しか出来なかった。
ついでにバクシン警報はまだ鳴りっぱなし。ブルースカイは長官にたたき起こされていたのであった。警報音について、後に2名のウマ娘が説教を食らったのは言うまでもない。
【商店街にて】
「おかけになった電話番号は　現在　使われておりません。おかけになった電話番号は　現在　使われておりません。　ツーツーツー・・・。」

全ての電話番号が不通であった。それでも何とか粘ろうとするルドルフ。しかし、胃袋は正直者だった。体力の低下を脳に疲労と音で伝達して来た。これに焦りが加わる。
その時、1人のウマ娘が声をかけて来た。飾らない雰囲気で庶民的な感じの。
「どうしたの？誰も出てくれなかった？アタシはナイスネイチャ。日本ウマソルジャートーニングセンター学園基地のソルジャー候補生だけど。あなたも？」

レース無き世界で　続け

誕生！　ブラックルドルフ　～レース無き世界にて～

カレンチャンは合気道が使える。強い！絶対に強い！
抜刀と納刀もやれそう。

【前回までのあらすじ】
（ウマソルジャーVは偽ルドルフの前に壮烈な敗北を遂げてしまった！彼女はテイオーコールにより圧倒的パワーを発揮したのだ！更にDr．マッドタキオンまで登場し、危うしルドルフ！貴重な突っ込み枠獲得争奪戦が遂に始まったグリーンスズカの心情は如何に！一方、商店街にて独りたたずむルドルフに謎のウマ娘が声をかける。ルドルフの明日はどっちだ!?）ナレーション。

【商店街にて】
（ナイスネイチャはウマソルジャー候補生である。常に安定した成績を残して、ヒシアマ長官の信頼も厚い。何より気取らない庶民的雰囲気が商店街というフィールド効果によって激増しいるのだ。ナイスネイチャは商店街にて最強の呼び声も高い、隠れた強戦士である。）ナレーション。
ルドルフはしばしば逡巡した。もしかしたら自分を搦め手で捕らえようとしているのではないか。そう疑ったのだ。
「ネイチャはそんな事しないよ！」
突如として小柄で大型の左右に広がった髪型のウマ娘が話しかけてきた。
「君は、何者だ？」
「マーベラスだよ☆」
マーベラスとは？　一体全体何のことか分からず、ルドルフは訝しんだ。
「マーベラスサンデー。サンデーと言わず、毎日がマーベラスらしいけどね。」

ネイチャがフォロー?する。マーベラスが何なのか、ルドルフは未だに分からない。
「マーベラスとは一体何なのだ?」
「驚き!・奇跡!・可能性だよ!・あなたも私もネイチャもみんな　みんなマーベラス☆この宇宙で唯一の真実在。」
思わず頭を抱えるルドルフ。中央は全てが地方と比べて段違いとは聞いていた。だがミスターシービーをはじめ、尽く粉砕し尽くすつもりで上京した。結果はご覧の様である。さっきから翻弄されっぱなしである。
「我ながら情け無いな。このようなたいらくでは。」
「そんな事ないよ☆　今のあなたはとってもとってもマーベラス☆」
連発されるマーベラス☆に戸惑うルドルフ。そこでネイチャに助けを求めるも。
「先ほどからマーベラス☆（キラッ）しか言わないな。」
「そういう子だからね。」
ルドルフは考える事を止めた。
「今のあなたはうちのウマ娘保護プログラムの対象ってわけ。受け入れてもらえないかしら?」
ルドルフは再び考え始めた。
確かに今の自分は文字通り天涯孤独の境遇である。まさか実家まで電話番号自体が存在しないとは。つまり、最後の駆け込み寺が消滅したのだ。
（このありさまでは警察に保護を求めても、同じかもしれない。）
（ウマ娘と人間は管轄が異なる。よってたどり着くのは結局ウマソルジャーである!）ナレーション。
「何か困ってるのかい?・ネイちゃん。」
商店街のおっちゃんが声をかける。
「新しい候補生の子かい?・」
「まあ、そんな所ですね。」
目が泳ぐネイチャ。何かを察したおっちゃんはつくね棒をはじめ何かと包んで渡して来た。

「ネイちゃんはとってもいい子さ。悪い様にはならないよ。腹減ってんだろ？これでも食べて元気出しな！」
思わずゴクリとツバを飲み込むルドルフ。
「冷めないウチにたべなよねー。」
遂にルドルフはタレの香りに陥落した。
ルドルフ、ナイスネイチャ・マーベラスサンデー・商店街のおっちゃん、つくね棒に敗れる！
【日本ウマソルジャートレーニングセンター学園
生徒会室にて】
「紹介しよう。皇帝戦士『会長』シンボリルドルフだ。」
出迎えたは女帝　エアグルーブだった。
「ただのぬいぐるみではないか！」
立派な椅子にはスターウマソルジャーのぬいぐるみが乗せられていた。これにはルドルフも突っ込まずにはいられない。スズカは既に突っ込み済みである。
「ですよねー。」
ネイチャも同意する。
「この通り、シンザン大先輩は既に卒業されている。そこに写真が飾られているだろう。」
「Ｖサイン?!」
カミソリシンザンの異名を取った彼女。しかし、写真では案外はっちゃけている。ルドルフは思わず嘆息した。
（私の超えたい偉大な大先輩が・・・。）
理想像が思わぬ形で破壊されてしまった。負けるな未来の絶対戦士！
「前会長は５冠ウマソルジャーだからな。ローマ数字とＶｉｃｔｏｒｙと掛けてＶサインというわけだな。」
ルドルフはあっさり復活した。
（Ｖサイン。フフッ。悪くないな。）
ルドルフは徐々にこの世界のノリに毒されてきたようである。
「そんでもって皇帝戦士　我らがシンボリルドルフ会長は７冠ウマ

娘ってわけ。滅多に姿を現さない伝説の聖戦士。そういう所、カッコイイよねー。（私には絶対に無理だよねー。）」
「7冠・・・だと?!」
　再び動揺するルドルフ。
（6冠ならまだしも更にもう一山乗り越えて7冠とは。）
　重圧！圧倒的重圧！今回ばかりは彼女も自分がシンボリルドルフと名乗っている事に違う感覚を覚えてしまった。
（遂にルドルフは9冠ウマソルジャーになる事を固く心に違ったのである！）ナレーション。
（勝手に私の心の内を決め付けないでしもらいたいのだが。）
（しかし、ここまで来たらもう5【Ⅴ】冠＋指2本で7【Ⅶ】冠、更に＋9【Ⅸ】冠ウマソルジャーを目指すしかない！）ナレーション。
（そもそもウマソルジャーではないのだが。しかし、名前が同じなだけの異なる役割ではあるが7冠か。既に達成されてしまった記録を再達成する事にどれ程の意義があるのか。私は5冠どころか7冠まで破らなければならないのか!?）
（記録破りのプレッシャーに襲われるルドルフ。しかし、貴重な突っ込み役が足りない為、なかなか適切なアドバイスを受けられないぞ！）ナレーション。
（ルドルフのステータスに【記録破りのプレッシャー（通し矢）】が追加されました。）別のナレーション。
「そこで会長と被る名前を名乗っている件についてだが。」
　なぜそこから話を始めるのだろうか？保護プログラムについての話から始めるべきではなかろうか。ルドルフは訝しんだ。
「そもそもの話し。シンボリルドルフって正直言いにくいしな。アナウンサーがそう言ってんだから間違いない。」
　ヒシアマ長官が妙な事を言い始める。不敬ではないだろうか。ルドルフは再び訝しんだ。
「ラ行が連続するのが辛いとか何とか。」
　マーベラス☆「じゃあ、とりあえずシンボリドルフで☆」
　エアグルーブ「ら抜きならぬ、る抜きか。なる程。」

なぜかそれに乗っかるエアグルーブ。
「てっ、貴様ら！　ゴホン！では話を戻すぞ。」
エアグルーブはノリ突っ込みを取得しました。（別のナレーション）
「ノリ突っ込み。いいね！とってもマーベラス☆」
荒れる生徒会室。先代時代の静寂は既に存在しなかった。
（この私が偽物扱いとはな。非常に屈辱的だ。もはや、ここまで来たならば実力で認めさせるしかないのか・・・。）
憤るシンボリルドルフ。誇り高き彼女にとって、文字通り噴飯ものの会話が交わされていた。
「あの、まずはウマソルジャー名としてブラックルドルフはどうかしら。ちょうど黒は誰もいないし。それに、黒は皇帝戦士に憧れるには相応しい色だと思うのだけども。本名は後で考えるのは。」
「ブラックルドルフ！カッコイイね！とってもとってもマーベラス☆」
「いいじゃないか！あたしは問題ない。ウマソルジャー5人相手に勝てるしな！試験期間は必要だが正規扱いでも構わん。」
（身元確認とかすっ飛してる気がするんですけど、気のせいですよねー。）
ヒシアマ長官の同意に突っ込むナイスネーチャン（ナイスネイチャ）する。シンボリルドルフはとりあえずブラックルドルフになった。
（伝説の皇帝戦士　シンボリルドルフに憧れるあまり、自分自身がシンボリルドルフと勘違いしている彼女。遂にブラックルドルフのソルジャー名を与えられたぞ！長きに渡る9冠ウマソルジャーへの戦いの日々。その火蓋が今切られる！）ナレーション。
「私がシンボリルドルフのはずなのだな。（そして、私のレースはどうなってしまうのか・・・。）」
「ブラック？どうしたの？」
突然、突っ込むブラックルドルフ。彼女は「誰一人として」ボケをかましていないにも関わらず、虚空に向かって突っ込みをしていた。

スズカが心配するのも無理は無い。
「ブラック。あなた疲れているのよ。今日は本当に大変だったから。」
（ブラックルドルフを受け入れたつもりはない・・・のだが。）
　勝手に話が進むにも関わらず、ブラックは突っ込めなかった。既に突っ込みの残弾数がゼロとなっていたのかもしれない。
（いや、そうではない。そうではないはずだ。私は疲れてはいるが、正常なはずだ。まともたのは私だけか！）
　ブラックは突っ込み症候群の初期症状を起こしていた。そんな彼女は今すぐ癒されなくてはならない！
　こうして色々ウマ娘省のお偉方や各方面に根回しがされ、「ブラックルドルフ」が誕生したのである。

【体育館にて】
「そういうわけで、今日から日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地に所属したブラックルドルフだ！仲良くしてやってくれ。ブラックと言うだけあって実力は折り紙だからな。ヒシアマ長官として保証しよう！」
　不在の会長に代わり、長官が演台でブラックを紹介する。まずは第一印象が重要だと彼女は意気込む。
「紹介にあずかったブラックルドルフだ。宜しく頼む。私は栄光ある・・・。」
「ウマ娘とは決断により己を形成する者である。その決断に責任を取るウマ娘である。偉大なるウマ娘とはその様な・・・。」
「唯一抜きん出て並ぶモノ無し。これこそが我がモットーであり・・・。」
　延々と自己紹介から演説を続けるブラック。彼女は長話を好むようだ。しかし、候補生達はお偉方の長話自体には慣れていた。その為、いつも通りのバ耳東風といった所で特に気にしてもいない。
（突っ込みとは体力と精神力を大幅に消耗してしまう、極めて高度な格闘技術なのだ！サイレンススズカやナイスネイチャが尊敬されているのはそう言う事である。）ナレーション。

しかし、ボケた会話や突っ込み所全開の展開そのものはには何の疑問も持たれない。あくまでも「突っ込み」とは「格闘技術・マーシャル・アーツ・ＣＱＣ的な何か」に分類されるのだ。

実力もヒシアマ長官直々のスカウトということで疑問視もされなかった。あのタイマン長官に認められたのだ。今さら食ってかかる意味など無い。まともに正面からやったらどうなるのか、想像するまでもない。

しかし、それにもかかわらず、候補生の中は彼女を快く思わないものがいた。恐れを知らぬ勇士、シンコウウインディである。彼女は長話が気に入らなかったのだろうか?そうではない。では内容が気に入らなかったのだろうか?そうではない。

彼女は最凶の噛み付きならぬ噛み切りウマソルジャーとなるべく、日夜歯を磨き抜き、穴掘りまでして鍛錬?を積んできた。その切れ味は同僚にも恐れられている程である。

しばしば暴走機関車の如き噛み付きグセを発動してしまい、そのせいで候補生止まりだったのだ。その頭を飛び越え、いきなりほとんど正規待遇となったのがブラックである。余り面白くないウインディ。彼女にはその自慢の前歯による恐るべき切断技がある。その牙でブラックとの直接対決を望むんでいたのだ!

(危うし、ブラックルドルフ!恐るべきシンコウウインディの前歯が迫る!負けるなブラック!負けるなウマソルジャーＶ!世界の夜明けは君たちにかかっているのだ!次回に続く!)

ナレーション。

続く　！

先陣争い！　倒せ！ブラックルドルフ　トウカイテイオー　対　シンコウウインディ

【前回までのあらすじ】
（遂にブラックルドルフとして「トレセン基地」日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地に（入隊）入学したブラック！期待されし突っ込み新人として、Ｄｒ．マッドタキオンの陰謀を打ち砕け！９冠ウマソルジャーが君を待っている！）ナレーション。
「入隊するしかなかった。この表現の方が正しいと思うのだが。レースは一体どうなってしまうのか。五里霧中とは将にこの事だな。」
（細かい事を気にしない事も正義！）ナレーション。
【ブラックルドルフ　対　シンコウウインディ　！
襲いかかる脅威の前歯】
その前に、ブラック出現に悩むウマソルジャー候補生がいた。彼女に与えられた名は「トウカイテイオー」。絶対戦士だったり皇帝戦士だったりするシンボリルドルフに憧れる、一人の少女である。
【トウカイテイオーの憂鬱】
（分かってるさー。まだボクは最強でも無敵でも無いって事くらい。）
最近トウカイテイオーは面白くない。グレてトレーニングしまくったり、暴飲暴食を避ける為、ハチミーの歌をカラオケでずっと歌ったりしているだけだ。肝心のハチミーは全然飲んでいない。気分では無いからだ。
それどころか、原因不明の「ボンヤリとした不安」が彼女を包み込んで離さない。ライバルのマックイーンも今は不在である。彼女にモヤモヤした気持ちも打ち明けられず、どこか悶々とした気持ちを抱え込んでしまっていた。
夕暮れ時の自室でボンヤリと聖戦士ダンバイン！ではなく皇帝戦士の肖像画を眺めるテイオー。沈む夕日に照らされたカイチョー。
（いつもカッコイイな！カイチョーは！でも・・・。）
いつもならば彼女の気持ちを晴らしてくれる憧れの絶対戦士。

カイチョー。神聖な存在である。憧れの存在である。自分がウマソルジャー候補生になったのは彼女の握手会での出会いがあったからだ。しかし、この漠然とした不安に追い打ちをかける出来事が起こってしまった。

よりによって、突如としてブラックルドルフというカイチョーもどきが現れてしまったのである。大事件である。候補生抜きでほぼ正規待遇というではないか。実力の程はヒシアマ長官直々のスカウトが立派に証明している。その実力が折り紙付きである事はもちろん分かっていた。

しかし、彼女にとって憧れの存在は唯一無二の存在で無ければならない。しかし、ブラックはカイチョーもどきである。

テイオーはカイチョーの写真集を全巻フルコンプリートした上、観賞用・保存用・使用用・特典付き観賞用・特典付き保存用・特典付き使用用と揃えてきた。だからこそ嫌という程分かってしまう。あのブラックが若き日のカイチョーに見た目が何から何までうり二つだと。

それどころか、彼女と同じ「唯一抜きん出て並ぶモノ無し」という格言を吐いたのだ。まるで、こう主張しているかのように。

（自分こそがカイチョーの後を追う正統な存在であると。）ナレーション。

「ボクはいつかカイチョーと同じ部隊で闘うんだ。それなのに。」

（このままではテイオーがダークホースに差し切られてしまうぞ！危うしテイオー！）ナレーション。

「ボク、闘わなきゃ。カイチョーもどきからカイチョーを護るのはボクしかない。」

こうしてテイオーは密かにブラックに対してタイマン勝負を挑む決意を固めたのだった。

（カイチョー不在。マックイーン不在。いつの間にか、テイオーはシットリテイオーへと変化しつつあった。）

ナレーション。

その様子を影からうかがう怪しいウマ娘がいた。何をかくそうD

r・マッドタキオンである。ちなみにダークマンハッタンCにはウマソルジャーVにを倒されてしまった後、有給休暇を取得させている。

「彼女はテイオー君か。確か好みはハチミーなるベトベトのかなり濃い飲料だったはずだが？」

前回、タキオンはマンハッタンに間違って紅茶を用意してしまった為敗れた。その為、テイオーを怪ウマ娘の素質間あるならば、まずは彼女が好きな飲み物を調べなければならない。

実はハチミーを既に用意していたのだが、最近彼女はハチミーを全く飲んでいない。おかげで、この飲み物で正解か悩んでいたのだ。

「うん、これは難しいね。再現性に難有りと。精神的にも不安定ではこちら側との連携にも難有りと。何かしら干渉を受けている可能性も考慮に入れるべきかな？」

実験データを集めたかったものの、タキオンは一端立ち去る事にした。

（【ブラックルドルフ　対　シンコウウインディ　！

襲いかかる脅威の前歯】）ナレーション。

今日のテイオーはいつも通りカワイイ。ハチミーの歌をとても楽しげに歌っているからだ。

（ハチミーはカイチョーもどきを倒したら飲むんだ♪）

所が唐突にハッピーハチミータイムに終わりが訪れた。

「イタイナー。誰だよもー。こんなところに穴を掘ったの。」

テイオーは人参畑の周囲に掘られた穴にはまってたのだ。

甲高い声で犯人を詰めるテイオー。その様子をざまあ見ろとばかりに飛び出して見下ろすウマ娘がいた。言わずもがな、シンコウウインディである。

「ウインディちゃんの大勝利なのだー!!!

これでブラックもイチコロだい！このシンコウウインディちゃんこそブラックを超えるウマソルジャーなのだ！」

子どもの様にはしゃぐシンコウウインディとそれをジト目で眺めるテイオー。ウインディとしては相手が悔しがってくれないといま

いち面白くない。
「なんで悔しがらないのだ！せっかくシンコウウインディちゃんはようやく大勝利したのに！」

「はあ。こんなんで　カイチョーもどき、どうやって『超える』のさ。それに倒すのはこの最強無敵戦士のテイオー様さ！」
　へへンと穴に落ちたまま腕を組んで見上げるテイオー。実はいつもの彼女とは少し様子が違うのだが、ウインディは気が付かない。
　いつも通り懲りる事を知らない彼女。いまいち勝った気が付かない。テイオーに煽られて「ウガー！」と前歯を剥き出しにして威嚇する。額に少しばかり汗をかき始めたとき、テイオーが口を開く。
（それならどっちが先にカイチョーもどきを倒すか競争しようよ！）ナレーション。
「ヒシアマ長官ってさ。タイマン勝負を押してたよね？」
　目を皿の如く見開くテイオー。
「それならタイマンでどっちが先にカイチョーもどきを倒すか競争しようよ！しよう。する。『倒す』。」

　ブラックを倒したい！燃える闘魂　ウインディはたまたまここに強力なライバルを見出した。最もテイオーのカイチョー好きは有名だ。その先陣争いに彼女が名乗りを上げるのは当然だろう。
「ようしっ！」
　闘志を漲らせるシンコウウインディ。ある意味、出会う相手は間違っていなかったようだ。こうして、タイマン勝負先陣争いが始まってしまった。ブラックルドルフの全く預かり知らぬ所で。
　全てはカイチョーもどきを倒す為に。

（頑張れ　テイオー！　頑張れ　シンコウウインディ！
　カイチョーもどきを倒すんだ！）ナレーション。
【対　ブラックルドルフ　昇降口にて　】
「何だこれは？」

ブラック（仮名）は困惑していた。「はだしのジョー」なる全く意味不明な文書？が靴箱に放り込まれていたからだ。
（あしたのジョー？なのか？）
打つべし！打つべし！あのボクシング漫画の金字塔を愛読するウマ娘は実は以外に多い。特に過酷な環境からレースの世界で腕一本でのし上がってきた者達には人気が高い。最もこの世界ではレースが無いのだが。
（開催はされてはいるが、あくまでも陸上競技の一種目に過ぎないのが残念だ。大勢のウマ娘と人々を惹きつける華に欠ける。）

こうして当然ながらタイマン勝負にブラックは現れなかった。
【食堂にて】
激辛麻婆豆腐。メイショウドトウが頼んだ一品である。
「あっ！イタっ！ハヒー！」
ピンクバクシンオーが悶絶していた。通常の3倍の辛さの激辛なのだから。しかし、ドトウは特に何も言う事無く食事を済ませてしまう。
「完敗です・・・。」
バクシンオーは激辛麻婆豆腐に負けた。すると、ちょうどグリーンスズカが食堂に姿を見せる。
「この席、空いてますか？」
「あ、あいて、いいですよ・・・。」
激辛に敗北したバクシンオーの隣に座るスズカ。同じウマソルジャーV同士、仲良く団欒の時間を楽しもうとしていた。しかし、彼女の平穏な一時は唐突に儚くも終わってしまう。
「たーのーもー!!!」
大音声でトウカイテイオーが乗り込んで来たからだ。
「畏れ多くもカイチョーっぽいカイチョーもどきはどこだあ！」
「カイチョーもどきとは失礼な！」
バクシンオーがバクシン的に反応、
「あ！いた。」

あっさり見つかってしまったブラックルドルフ。ハチミーの歌を歌い上げながら、なぜか途中からテイエムオペラオーが合流して来る。
「どっちがカイチョーと一緒に闘うか勝負だ！」
「二人のウマ娘を巡って争うとは、なんて悲劇的なんだ！止めたまえ君たち。争いは可憐な華と違って何も生まないというのに♪」
何気に仲裁に入ろうとするオペラオー。彼女は実は以外にも常識的である。表現方法が風変わりなだけで。
「あー、もううるさい！静かにして！」
「君のハチミーの歌はいつもと違う音色だ♪可憐な君には似合わない♪」
オペラオーとやり合うテイオー。食堂は明らかに騒がしく、野次ウマ娘が増えて来ていた。
「これでは話がすすまないな。仕方がない。外に出るぞ、テイオー。オペラオー？さん。仲裁に感謝する。しかし、決着はつけなければならないらしい。」
「ボクは見届ける事しかできないのか♪それが～オペラオーのさ～だ～め～♪」

【競技場にて】
「で？さっさとブラックルドルフと勝負がしたいって？テイオー。」
ルドルフはヒシアマ長官が間を取り持つ事を少しだけ期待していた。
「ならタイマンだ！正々堂々勝負しな！」

どうやら相手を間違ってしまったようだ。
「シンコウウインディちゃんが先なのだー！」
地面の穴から突如として飛び出して来た彼女。手には「はだしのジョー」が握られている。

ウインディ「テイオーより先に送り付けたぞ！」

ヒシアマ長官「そうなのか、ブラック？」
ブラックルドルフ「確か・・・そうだったと。」
ヒシアマ長官「なら話は早い。ウインディが先だ！」
ヒシアマ長官の裁定により勝ち誇るシンコウウインディ。既にブラックに勝った様な勝ち誇った表情を前歯と共に見せつける。テイオーに向かって。
「いいから、さっさと始めてよー。次ボクの番だからね。」
「ではブラックルドルフ　対　シンコウウインディ　のタイマン乱取り勝負、始め！」
ドカンと土がめくり上がり、ウインディが大口を開けて突進する。短距離における瞬発力はかなりのもので、ルドルフは体捌きで避ける。
（この瞬発力は！出来る！正規の隊員になれないのは惜しいな。）
地面すれすれを飛ぶウインディ。大地の僅かな起伏を基点に今度は回転しながら跳びかかる。凶暴な前歯がギラリと光る！
「だが、単純過ぎてコースは丸わかりだ！」
ルドルフは先程と同様に体捌きでかわそうとするが、
「引っかかったのだ！」
ルドルフと交差する瞬間、ウインディは閉じていた両手両足を広げた。ブラックは3本目まではかわしたものの、右手に上着が文字通り引っかかってしまった。バランスを崩すルドルフ。
しかし、次の瞬間ウインディの視界は暗転した。服を掴んだ右手を基点に、払い腰をしかけられてしまったからだ。そのまま、寝技で固められてしまい、ウインディは自慢の前歯を使えなくなってしまった。
「一本！勝負あった！ウインディの負けだ。おい？ウインディ？」
「＆＊@@▪……†▪……‡▪……‡▪」
ウインディはのびていた。
「大丈夫か！済まない。柔術は絶対に畳の上でやるべきだったというのに・・・。私は・・・何という事を。」
悔やむルドルフ。しかし、ヒシアマ長官は特に気にしていなかっ

た。
「ウインディはこの程度でどうにもこうにもならないよ。何度注意しても懲りないヤツさ。それになんたってウマソルジャーの候補生だから。それにしても、簀巻きにして突撃させたら案外使いモノになるかもな。よーし、保健室で休ませておけ！」
「それはある意味罰ゲームでは？」
スズカがさっそく突っ込む。周囲には既に大勢の野次ウマ娘が取り囲んでいた。
「次はテイオーだな。さっさと終わらせるか。」
ヒシアマ長官が次の対戦カードと切ろうとした。その時、突如として長い髪をなびかせながら、赤い勝負服に身を包んだ長身のウマ娘が飛び込んで来た。黒いサングラスをかけて。
「待ちな！その勝負、このマックイーンが引き受けた！」
その場でヤケに絵になる立ち姿をした彼女。イカした表情で親指を立てながら、自分自身を指さして。
（（（（誰？）かしら？）だよ？）だ？）マイケル・ジャクソン？）
その場の全員が総突っ込みをした。

次回　ニセマックイーン登場！

衝撃、ナレーション乱入　ニセマックイーン登場！
脅威！ビワハヤヒデの頭

【前回までのあらすじ】
（ニセルドルフを倒せ！トウカイテイオーはカイチョーもどきを倒さなければならない！一方、単純に前歯を使いたいだけのシンコウウインディ「うるせー！○○○ちゃん、ドロップキック！」。彼女にはウインディはブラックルドルフに倒されてしまった！頑張れテイオー！無敵最強テイオー様がニセルドルフを倒す、「うるさーい！これ以上はこのマックイーン様が黙ってないぜ！」ゴールドシップに乱入ペナルティ）ナレーション（沈黙す）。
【ナレーションに乱入!?ニセマックイーン登場！】
　突如として現れた謎のウマ娘。ニセマックイーン。
　明らかにマックイーンでは無いマックイーン。本物の彼女はボケもシリアスもシリアルもこなすパクパクの名女優である。しかし、こんなに背は高くもないし、スタイルも異なる。何より勝負服のスタイルも色も全然違うのだが。
「ゴルゴル星より現れし、このマックイーン様をお探しかい？」
「誰？　じゃましないでよ。もおー！」
　テイオーは腕を振り回して怒った。タイマン勝負に水を差されたのだから当然である。
「それに、マックイーンの勝負服は赤くない！」
「あれ？おかしいな。○ー○○○ッ○って言ったはずだけれど。まっいいか、それも面白そうだし。」
　勝手に納得するニセマックイーン。テイオーはその様子をジト目で警戒する。
「ゴホン！それでは気をとり直して。先ずはそう焦るなって、なあテイオー。」
　さっさと勝負服を換装してマックイーン風に着替えるニセマックイーン。その素早い着替えにはテイオーも思わず目を見張る。

「ほほほほ、パクパクですわ。」
「マックイーンはそんな事言わない（案外言うかもね）。」
　テイオーに突っ込まれるニセマックイーン。だが、黒いサングラスに仁王立ちしたまま動じない。そして唐突にテイオーの方を振り返って言う事には、
「分かんないのかテイオー。ブラックを倒した所でカイチョーが喜ぶのかよ。内ゲバもいいところだぜ。あいつだったら、そんな事許さないだろーな。ガッツが足りないんだよ、ガッツがさ！」
「それは・・・そうかもしれないけど。だったら、ブラックルドルフって誰なのさ。」
　調子を狂わされてうなだれるテイオー。
「テイオーと言ったかな？」
　ブラックルドルフが近づいてきて思わず汗ばむ彼女。ニセルドルフのはずが本物そっくりの風格を纏っているものだから堪らない。
（本当にそっくりだ。昔のカイチョーに・・・。ボ、ボク、どうすればいいんだろう。）
「なぜそうまで焦るのだ。」
「・・・?!」
　黙るテイオー。しかし、ブラックルドルフの真っ直ぐ見据えた視線からは逃れられない。
「勝負あったな。」
　判定を下すヒシアマ長官。しかし、流れに水を差す野暮な真似はしない。先ずは、テイオーと「ルドルフ」の邂逅を見守る事にしたようだ。
「何も焦ってないよ！第一、ニセモノが本物みたいな事を言うなー！」
「今はこの私がニセモノかどうかは関係無い。『そこは気にしようぜ。（ニセマックイーン）』君は今まで他のウマ娘にわざわざ突っかかる真似をしてきたのか？レースはどうした？この勝負はテイオーの名にふさわしい王道たるものだろうか。私には脇道に見える。真っ直ぐゴールを見据えるウマ娘に、この様なぶざまな勝負は必要ない。ただレースで決着を着けるだけだ。何が君に脇道へとそらさせた？」

「・・・。」
謎の迫力に思わず押し黙るテイオー。ぐずつき、そのまま肩をすくめると、走り出してしまった。
「危なかったな。ありゃ、怪ウマ娘化寸前だったぜ。お疲れさん。ここじゃ、安心してあたしはボケ役もこなせない。ヒジョーにキビシイー！」
「怪ウマ娘化だと？」
驚くブラックルドルフ。初めてピンクバクシンオーと会った時の事を思い出す。怪ウマ娘を倒す。その時はトレセン学園基地が作られたと言っていた。
「聞いていなかったのか。Ｄｒ．マッドタキオンのダークマンハッタンＣだって、元はウマソルジャーの候補生なのさ。早い話が同士打ち、自分のケツを自分たちで拭いているだけさ。」
そうこうしているうちに集まる五人の戦士達。その名も。
「出たなニセマックイーン！今日こそこのレッドペガサスがキャロットキックでたお―す！」
「グリーンスズカ！マックイーンのニセモノは放ってはおけないわ。」
立ちはだかるウマソルジャーＶ達。しかし、ブラックを入れても３人しか揃っていない。
「ブルー！ピンクウララ！後、誰かしら？」
「ピンクバクシンオーです。ピンクバクシンオー。ピンク被りで忘れないでくださいスズカさん。」
ピンクバクシンオー登場！
「バクシンレーダーに感有り！怪ウマ娘が近くにいますよ！」
ブルースカイ「また壊れてたりして～。」
「してません！委員長クオリティーですから！」
「今日も騒がしいな、お前ら。」
ウララはまだ到着していなかった。足が一番遅かったからである。
トレセンビッグＶ候補生、ナリタブライアンはぼやいた。
【暴発！　ビワハヤヒデの頭　出撃せよＶｉｃｔｏｒｙ　ロボ！】

が開始されました。

モブウマ娘「大変だ！栗東寮が毛むくじゃらに！」

慌てたウマ娘が駆け寄って来る。幸い巻き込まれた被害者はいない。タイマン騒ぎで大勢のウマ娘達が闘技場に居たおかげである。

ヒシアマ長官「まさかＤｒ．マッドタキオンの仕業か?!てか、ニセマックイーンは？」

ニセマックイーンは既に姿を消していた。

スズカ「タキオン、おかしな薬品をよく作っていたから。」

しかし、ナリタブライアンは訝しんだ。

「そいつはおかしな話だ。まだタキオンが基地の科学者だった時、姉貴はわらにもすがる思いであいつに頼った。結果は惨敗。タキオンの奴は姉貴の頭に負けたのさ。さすがは姉貴だ。」

ヒシアマ長官「フジはどうした？栗東の寮長だろう！」

モブウマ娘「それが行方が知れずで！」

ヒシアマ長官「仕方ない。ニセマックイーンは後回しだ！先にあの毛むくじゃらを何とかするぞ！」

ブライアン「クソッ！門限を守れと言ったのはどこのどいつだ。」

【さらば！　ウマソウルジャーＶ　ｗｉｓｈ　ｍｙ　ｆａｔｅ　タキオン始動編が開始されました。】ウマ娘たちの記憶の同期を開始します。

～　唯一抜きん出て並ぶ者無し　～

日本語訳としてはそうなる英文が見える。ここは栄えあるトレセン学園の生徒会室。シンボリルドルフの根城である。

しかし城主たる『独裁者』ルドルフが目指すは既に次の段階にこそある。

～あらゆる全てはウマ娘の幸せの為に　～

その為の学園。その為のウマソルジャーＶ。そうではないかね？

覚悟を決めた以上は逡巡など無意味ではないか？

（フジキセキ…。）

ルドルフの憂いに満ちた眼差しに一人のウマ娘の姿が浮かび上が

る。

ちょうどその時、足音が部屋の前でコツコツと音を立てて止まった。

「呼んだかい。」

部屋に入って来たのはヒシアマ長官ことヒシヤマゾンである。タイマン長官はやや疲れを感じる表情で命令を伺う。

ルドルフは内心思う。昨今取り巻く状況はトレセン学園にとって好ましものではない。更には時間が美浦　粟東内紛からさして経っていない。だからこそ迅速且つ果断に対処しなければならない。

「ビッグＶ　会長として命じる。ウマソルジャーＶの指揮官としてフジキセキを捕縛しろ。ウマ娘対策課の者達が動く前にだ。わかるな？」

しばしの沈黙と共に両者の間を無言の矢飛び交う。しかしその矢を皇帝は受けきり、そしてなお長官を見つめるのだった。

「分かった。」

【記憶の同期を正常に完了致しました。】

「フジ先輩・・・。あなたはなぜ？」

悲しむスズカ。何が起こっているのかブラックルドルフには分からない。勝手に周りは納得し始めたのでいつも通り訝しんでいた。

「４時の方角、距離４００、怪ウマ娘、来ます！」

遂に闘技場に大量の白い髪をなびかせたウマ娘が現れた。ビワハヤヒデそのウマ娘である。

「はははははっ！私は！私は遂に私自身の髪を制御したぞ！」

やけに高いテンションで喜ぶビワハヤヒデ。ブライアンもはなをすすりながら涙ぐむ。

「苦労したからな。姉貴は。やっと爆発頭から解放されたか。」

「ブライアンさん。あなたのお姉さんが怪ウマ娘になっているのだけ

れど。タキオンに負けてるけれど。様子もおかしいと思うのだけれど？」
　それを聞いたブライアン。先ほどとはうって代わっていきなり怒髪衝天を突き、拳を振り上げた。
「許さんタキオン！私が姉貴を助ける、邪魔するな！」
「いきなり突っ込むのは止めた方が・・・。」
　ブライアンはそのまま大量のビワハヤヒデの髪に飛び込む。すると、たちまち縛り上げられて動けなくってしまった。彼女は複雑怪奇に絡み付く髪質を捌ききれなかったのだ。
「ブライアン。私のカワイイブライアン。今日からサラサラストレートヘアとは永遠におさらばだな。」
「クソが！姉貴！目を覚ませ！姉貴の悩みを私は分かってやれなかった！」
　まさか実の姉から髪質を改造されると思わなかったブライアン。その脳裏に数々の思い出が甦る。
　昔話をしよう。まだ幼かった頃の話だ。ビワハヤヒデは頭を洗う度に滅茶苦茶な髪型になってしまうのをからかわれた事があった。深く傷ついた彼女はしばらく頭を洗う事を止めてしまった。その結果、ハヤヒデの頭はクサクなってしまった。
　昔話をしよう。まだ幼かった頃の話だ。ある日ビワハヤヒデは完璧に髪を整えて友だちのウマ娘の誕生日パーティーに行こうとした。しかし、突如として突風が彼女を襲う。幼かったハヤヒデの頭は一瞬にして滅茶苦茶になってしまった。彼女がようやく髪を整えて着いた時には既にパーティーは終わっていた。
　昔話をしよう。まだ幼かった頃の話だ。業を煮やしたビワハヤヒデはバリカンで自分の頭を勝手に刈り上げてしまった。結果は悲惨を極めた。あちこちハゲてしまい、
　長さもバラバラだったからだ。彼女はしばらく学校を休んだ。
（ロクな思い出がねえ！）
　ブライアンは悩む。確かに怪ウマ娘は倒さなければならない。しかし、ウマ生史上初めてビワハヤヒデは自分の髪を完全に支配してい

る。長年隣で見てきたからこそ分かる。
（いっその事このまま、今の方が幸せかもしれないな。　なあ、姉貴・・・。）
　彼女の心が揺れかけたその時、ブラックルドルフが吠える。
「甘ったれるかビワハヤヒデとやら！己の髪さえねじ伏せられないウマ娘がダービーを制覇出来るものか！ブライアン！ハヤヒデの目を覚まさせるぞ！」
【校舎裏にて】
　一方、テイオーは本物に怒られた時の様にシュンとしてしまっていた。
（ボク、何やってるんだろう。勝手に暴走までして。結局何がやりたかったの？）
「走りたかったのさ。」
　突如として現れたニセマックイーン。なぜかキラキラしたオーラを放っていた。
「誰だよ、もー。」
「宇宙ウマ娘、超能力ウマ娘、未来ウマ娘、異世界ウマ娘。ゴルゴル星から来た正義の使者。好きなのを選びな。」
「意味わかんない！」
「ブラックルドルフもか？」
　ニセマックイーンの問いにテイオーはうなずく。
「あいつはカイチョーさ。あたしが保証するよ。あのカイチョーに怒られた時と同じ感覚だったろ？」
「・・・それはそうだけど。」
　肯定したくは無いが、体は正直だった。確かにあれはまさに皇帝の神威の一端であった。まだ未完成ではあるが。
「あいつはまだ力不足だ。助けてやってくれ。てか、助けろ。」
「エー。」
「ほれほれ。手柄をニセモノに盗られちまうぞ。それでもいいってか？テイオーさんよ。」
　しばしば逡巡するテイオー。しかし、答えは初めから決まってい

た。
「ボクは・・・必ずカイチョーと同じ『レース』で戦っみせるんだ。だから、こんな所で立ち止まったりしない！」
「いい『レース』を期待してるぜ！テイオー。」
　ニセマックイーンはサングラスを外すと眩しそうに彼女の背中を見つめるのだった。
（ゴールドシップはクールに去るぜ。）

【闘技場にて】
　次第に白い大量の髪の毛が巨大なウマ娘の姿を取り始める。もはや一刻の猶予も無い中、ブラックは叫ぶ。
「長官！早く対策が必要だ！」
「任せな！クソっ！フジめ、やりやがったな！　トレセンビッグVにヴィクトリー　ロボの発進の許可を求む！」
「仮権限だが、私が許可を出す。最も姉貴に簡単に勝てると思わない事だ。」
「ブライアン、あなたどちらの味方なの？」
「私はいつだって姉貴の味方さ。」
　どうにか脱出したブライアン。それにもかかわらず姉貴を称えるシスコンぶりに、内心スズカは呆れていた。
「ヴィクトリーロボ？はまだなのか？」
　モブモブウマ娘「大量の毛髪で身動きが取れないとの報告が！」
　無数の触手の如きビワハヤヒデの頭。まるで現代のメデューサにさしものウマソルジャーVも苦戦する。
（このままでは基地が！）
　もはやここまでかと思われた時、小柄な一人のウマ娘が現れた。
「最強無敵のテイオー様。ここに復活！」
「テイオー!?脇に抱えているのはシンコウウインディ！どうして簀巻きに?!」
　突っ込むスズカ。すると、影からブルースカイがユラリと現れた。
「私が捕獲しといたのさ。全然大変じゃなかったけどね。後は説明通

りによろしく～テイオー。ＺＺＺＺ。」
「ボクに任せて！」
どことなく逞しくなったテイオー。全身をなぜか迷彩にして、小脇に無理やりシンコウウインディちゃんをかかえている。おそらくはそのせいだろう。
（テイオー。良く帰ってきたな。頼りにしているからな。）
ブラックルドルフは実際そうしたセリフは言っていない。しかし、テイオーはブラックがそう褒めたと「認識している」。（それで良いのだ。）ナレーション）。すると彼女は反射的に嬉しくなってしまい、勝手にアドレナリンで大興奮していた。
「ウインディちゃんを放すのだー！」
暴れようとするシンコウウインディ。しかし、簀巻きにされているせいで、歯噛みする事しか出来ない。
「そうか！そういう事か！でかしたテイオー！」
ブラックはブルースカイとテイオーの意図に気づいて褒める。今度は本当に褒めているのだから問題なかろう。テイオーは照れ隠しにそっぽを向いた。
（嬉しいのかな？でも、カイチョー程では無いけどね。）
ブラックルドルフの言葉は確かにテイオーの脳内物質に影響を与えている様だ。
ブライアン（姉貴の髪、一束ぐらいもらってもばれないか。ぬいぐるみの中綿にでもするか。）
スズカ（ブライアン・・・。声に出てる。）
（遂にブラックルドルフとトウカイテイオーの夢のタッグが実現したぞ！リーサルウェポン、簀巻きのシンコウウインディが遂に火を噴く！次回！決着と大怪獣オグリン現る！次回もみんなで見よう！）
復活したナレーションＢ。

続く。

ビワハヤヒデ　対　Ｖｉｃｔｏｒｙ　ウマロボ！
大怪獣オグリン　覚醒か！

【ビワハヤヒデ　対　Ｖｉｃｔｏｒｙ　ロボ！】
（前回までのあらすじ。暴走するビワハヤヒデの頭を止めろ！
ニセルドルフに憤るテイオーとシンコウウインディ。
しかし、ニセマックイーンに諭されたテイオーは再び闘う決意を固めるのだった。ブルースカイの助けを借りて、簀巻きのシンコウウインディと共に立ち向かえ！）ナレーションＢ。
「ウインディちゃんをはなすのだ!!」
激しく歯噛みするウインディ。簀巻きにされているのだから当然である。テイオーはウネウネ動くビワハヤヒデの中に彼女を放り込む。
「どんどん噛み付いちゃって！」
華麗なテイオーステップで次々毛髪を捌いていくテイオー。大量の髪がカミキリムシの如く切られていく。流石は凄まじい切れ味を誇る前歯である。効果は抜群だ！
「うがー！なんでこんな事に！」
「ウインディにはちょうどいい薬だ。散々噛み付きで試験落ちしても懲りないときたからな。」
ヒシアマ長官は腕組みしながら勝手に納得していた。
「行くぞテイオー！」
ブラックは髪の毛をウインディちゃんの前歯にとりあえず挟み込む。
「もう、でも任せて！」
簀巻きのウインディは逃げられない。おかげで工場の切断機の如くかみ切るしかない。
みるみるうちに切断されていくビワハヤヒデの髪。そこら中に白い美しく髪がたまっていく。
「力こそ正義！ウマソルジャーＶに敵はいない！」

レッドペガサスは腕組みしながらご満悦だった。
一方、ナリタブライアンは十分な量の髪を確保したのでご満悦だった。
「なーんだ。サイキョームテキのテイオー様の前では、」
「ウインディちゃんを忘れるなー！」
「ごめん、ごめん。後でハチミーおごるからさ。機嫌直してよ。」
気が付けばほとんど丸裸になっしまったビワハヤヒデ。
「テイオー。よくやったな。」
ブラックに褒められるテイオー。ニセルドルフにも関わらず、まるで神経を直接弄られたかの様に勝手に嬉しくなってしまう。簀巻きのウインディをほったらかして照れていた。
「こ、今回だけだからね！（でもブラックがカイチョーもどきなのは納得してなんだから。）」
（とりあえず一件落着したブラックとテイオーの対立。今後ますますの活躍が期待出来るだろう。）ナレーションB。
「姉貴・・・。今助けてやるからな！」
「後はハヤヒデ自身を捕まえるだけね。元に戻せるといいけれど。それとウララはまだ？」
心配するグリーンスズカ。ウララ不在のまま話は進む。
（果たして怪ウマ娘化したビワハヤヒデは元に戻せるのか！）ナレーションB。
「おっと、そう上手くはいかないよ。彼女はバナナの誘惑には勝てないのさ。」
「Ｄｒ．マッドタキオン！やっぱりお前の仕業だったのか！必殺、キャロットマンキーック！」
ビコーペガサスはキックをお見舞いしようとするも、大量の毛髪に邪魔されて上手くいかない。
バナナを手にして現れたタキオン。さっそく皮を？こうとするが、こちらも上手くいかない。
「この科学者に有るまじき萌え袖が！」
（自分で自分に突っ込むタキオン。しばしば考える彼女。引きちぎろ

うにも頑丈な繊維のせいで直ぐには出来ない。ならば、腕まくりをするのが良いだろう。頑張れタキオン！）ナレーションB。
「それには及ばないよ。ここにちょうど良い生きた切断機があるからね。シンコウウインディ。簀巻きにされたままでいいのかな？良いように利用されて満足かい？」
「つ、疲れたのだ・・・。」
「しまった！ウインディが！」
　せっかく最後の直線で差し抜けそうにも関わらず、噛み付いたせいで勝機を逃した時の様である。Ｇ１短距離初代王者でも噛み付きは止められないのだ。
「そうかいそうかい。ならば、はい！強壮剤。」
「もう、いやなのだー！」
　しかし、簀巻きにされているため、楽々液体を口に流し込まれるウインディ。復活した前歯は萌え袖をあっさり食い千切った。
「これでバナナの皮を剥くのに支障をきたす事もない。」
　さっそく剥かれたバナナがハヤヒデの口に入れられる。
　バナナ大好きビワハヤヒデ。かなり大きなモノにもかかわらず、たちまち５秒で咀嚼してしまった。バナナ先輩と言われる所以である。
「バナナを食べたビワハヤヒデくんは巨大化して復活する！カフェの時は失敗したが、おのれウマソルジャーＶ！」
「カフェなのに紅茶を用意したあなたのせいでは？」
　スズカは突っ込むが、巨大化は止められない。
　ペガサス「ヒシアマ長官！もうアタシたちムリー。」
（山の様な髪の毛に埋もれるペガサス。　しかし、ピンチにはヒーローが駆けつけるものだ！　）ナレーションB。
　ピンクウララ　「格納庫のロボットが復活したよ！」
　ブルースカイ　「シンコウウインディにあらかじめかみ切らせておいたのさ。ただ再整備が大変でね～。ネイチャにも手伝ってもらったよ～。」
　ヒシアマ長官　「ブラック・テイオー。今までよくやったな。でかした！　Ｖｉｃｔｏｒｙ　ウマロボ　発進だ！」

ウマソルジャーＶ（（（（みんなのニンジンを一つにー！））））
百万ボルトの輝きを放ち、遂にウマロボがやって来る。
「何だ、これは・・・？」
来たのは五台の巨大な芝刈り機だった。どう見てもロボ的な何かには見えない。色がピンクなのはどういう事情だろうか。
ウマソルジャーＶ（（（（変形合体！ウマソルジャーＶ　Ｖｉｃｔｏｒｙ　ウマロボ　見参！））））
五人がそれぞれの芝刈り機に乗り込むと、ウゴウゴ言いながら、合体しだす。その間、ブラックルドルフとテイオーは野次ウマ娘たちの避難誘導をしていた。
（カイチョーはカッコイイのは当然だけど、ブラックも結構・・・。）
まるで本物の如く現場を指揮するブラックにテイオーはカイチョーの面影を重ねざるを得なかった。十分では無いにしろ、憧れの彼女に近づかんとする迫力は認めざるを得ない。
（ボク、負けない！ブラックには負けない！）
決意を新たにするテイオー。遂にブラックをカイチョーと闘うまでのライバルだと認めたのだ。
（もちろん、サイキョームテキのテイオー様は負けないけどね！）
巨大化したビワハヤヒデ。再び髪を鞭の様にしならせ、
合体したＶウマロボを攻撃して来る。
このままでは
ブライアンの時の様に絡め取られてしまうだろう。危うし！Ｖウマロボ。危うしウマソルジャーＶ。
「あれをやっちまいな！必殺技だ！」
ヒシアマ長官が叫ぶ。すると、ウマ娘ならば全員が持つ謎空間。背後のアイテム空間から巨大なニンジン型の剣が取り出された。
「Ｖｉｃｔｏｒｙ　キャロット　ソード　だ！凶刃！無敵！サイキョー！」
ハイになるペガサス。グリーンスズカその様子に少し引いていた。
（これが正義のウマソルジャーＶの姿なの？）
襲いかかる巨大ビワハヤヒデの髪を、燃えるニンジンソードが焼き

切っていく。当然独特の凄まじい悪臭が放たれているのだが、気にしてはいけない！
　攻撃が通用しない事を悟った巨大ビワハヤヒデ。遂にまえかきをして突進の前兆を見せてくる。
「まずいな。Ｖウマロボ　は変形合体の芝刈り機だ。あれだけの質量をまともに受けとめればバラバラになってしまう。タイマン技で何とかしな！」
「委員長でも無茶ですよー！」
　焦るヒシアマ長官に困るピンクバクシンオー。だが、ペガサスは諦めない。
「もう一度、五人の力をニンジンソードに！」
「セイちゃん。もうむ～り～。」
　すると、ペガサスはふところから五本のニンジンを取り出した。
「じゃあこれ食べて！ヒシアマ長官からもらったの。」
「むがっ！」
　ペガサスは寝ようとしていたブルースカイの口にニンジンを突っ込んだ。ニンジンのリコピンパワーが正義のウマ娘を立ち上がらせる！
「これはドーピングでは？」
　ブラックは訝しんだ。
「細かい事を気にしない事も正義！」
　ブラック「全然細かくない気が。」
　ペガサス「勝てば良かろうなのだー！」
　スズカ「それ、ヒーローのセリフじゃないと思うけど。」
　戸惑うスズカ。彼女の突っ込みライフポイントはゼロに近い。
　テイオー「避難誘導終わったよー。（レッドて以外と天然鬼畜なのかな？）」
　ヒシアマ長官「よくやったなテイオー。これで心置きなくアレがやれるな。全員退避ー！退避ー！」
　高熱で燃え上がるニンジンソード。ウマロボは襲いかかるハヤヒデを前にぐるりと巨大な日輪を描く。それがバリアの役割を果たし

てハヤヒデは前には進めない。
(((((ニンジン焼き袈裟切りアタァァーク)))))
炎の日輪を斜めに切り裂くVウマロボ。ハヤヒデはとっさに髪の束でタテを形成するも間に合わない。そのままタテは焼き切られて、彼女は爆発した。ついでにＤｒ．マッドタキオンも爆発した。
「おのれ！ウマソルジャーVうううっ！」
「何でタキオンまで爆発するのー！」
スズカはもう突っ込む事しか出来なかった。大穴には元の大きさに戻ったハヤヒデが倒れていた。直ぐさま駆け寄るブライアン。大穴にさっそうと飛び込むと、容態を確認する。どうやら命に別条は無い様だ。
「姉貴！目を覚ましてくれ、姉貴！そこまでクセ毛に悩まされていたとは知らなかったんだ。クソッ！何が生徒会だ！何がトレセンビッグV候補生だ。私は姉貴の事を何にも・・・。」
ハヤヒデは目を開く。クセ毛という言葉に反応したのだ。
「サラサラ流れるストーリーヘア。一度は手にしたった・・・。ブライアン。お前の髪を大切にな・・・。」
「姉貴いいいいい！」
悲痛な叫び声を上げるブライアン。繰り返すが命に別条はなく、ウマソルジャー生命にも特に問題は無い。しばらく休めばそれで十分だろう。
「兄弟で髪質が違い過ぎた。この事が今回の悲劇をもたらしたのか。だが、ダービーは当分の間お預けだな。」
ため息をつくブラックルドルフにテイオーが近いてきた。
「その・・・。さっきのブラック。ちょっとカッコよかったよ。ちょっとだけだからね！」
「お互いよくやったな。テイオー。」
ブラックはテイオーの頭を撫でる。テイオーも満更でも無さそうな表情だ。
(その時！ブラックルドルフ、いやシンボリルドルフの脳内に電流が走る！) ナレーションB。

（これは、この光景を、私は前に見た気がする。確か、
有馬記念か・・・。）
困惑するブラック。知らないはずの記憶が蘇る。当然、
彼女はまだ有馬記念には出走した経験などない。ましてや後輩を
褒め称えるなど有り得ない。
（テイオー。きみはいったい何ウマ娘なんだ・・・？）
一方、こちらはグリーンスズカ。突っ込みウマソルジャーとして
やってきたものの、ふとブラックの「ダービー」と言う言葉に反応し
ていた。
（ダービー？逃げ切りシスターズの持ち歌かしら？逃げシス・・・。）
こうして、数々の出会いと波乱の展開を見せたビワハヤヒデ事件。
遂に幕を下ろしたのだった。事件解決後、
シンコウウインディには特別功労賞が授与されたのだった。一方、
ブライアンとビワハヤヒデは忽然と姿を消してしまっていた。トレ
セン基地のお偉方が大慌てになったのも当然である。
【商店街にて】
ブラックはナイスネイチャと商店街に来ていた。
「ブラックちゃん、ありがとうな。これ持っててくれ。」
焼き鳥屋のオッチャンが色々クシを包んでくれる。
「ほら、ネイちゃんの分もあるからさ。」
「アタシは、ほら、大して活躍してないかれさ・・・。」
渋るネイチャ。実際簀巻きウインディを上手になだめすかしなが
ら、器用に駆動系に絡まっていた毛髪を取り除いていたのだが。
「先に帰るから。オッチャン、ブラックの事宜しくね。」
ネイチャはそそくさと商店街を後にする。その後ろ姿には諦めが
張り付いていた。
「彼女は自信が無いのか？」
「とってもいい子だし、いつもいいところまでいくんだけどねえ。こ
の前だって商店街に被害が出てないか確認してくれたし。」
オッチャンは優しく、しかしどこか寂しげにネイチャの後ろ姿を見
るのだった。

【カサマツトレーニングセンター学園基地にて】
　その頃、カサマツでは大変緊迫した事態が発生していた。
「カサマツにてOの微細な精神活動を確認！　警戒態勢を要します。食欲腺、線量尚も増大中！」
「特殊災害警戒態勢　第一種警戒態勢を取れ。日本ウマソルジャートレーニングセンター学園基地直ちに打電！近日中に第二種警戒態勢に移行の可能性あり、近日中に第二種警戒態勢に以降の可能性ありと！」
　大怪獣オグリン。脅威の食欲腺を放つ怪ウマ娘が遂に復活しようとしていた。
（しょせんは地方では抑えられなかったという事か！）
　カサマツの長官は悔しかった。しかし、時は来たのだ。
（後は中央のウマソルジャーに託するしかない。）
（中央だけでは足りなければ、関西に応援を頼むかもしれんな。名古屋のら味噌カツ・手羽先・名古屋コーチンのラーメン店は恐らくは守りきれない。Oは関西で食い倒れるか？それとも中央か？防衛ラインを東西に張らなければならないのは痛いな。ウマソルジャー総攻撃というわけか。白きイナズマに応援を要請するか？）
　カサマツの長官はひたすら頭が痛かった。彼女には今すぐアスピリンが必要である。
（トレセン基地に新たな危機が迫る！白きイナズマとはいったい何ウマソルジャーなのか！暴食因子O細胞とはいったい何なのか？謎が謎を呼ぶ展開に君はついて来られるか?!　次回！トレセン後継機命令
　大怪獣オグリン　対　白きイナズマ　&　強き母性
　遂に葦毛の怪物　中央に上陸す！）ナレーションB。